琉球大学学術リポジトリ

映像人類学の可能性：
比嘉政夫先生の撮った1980年代のタイ・雲南・貴州

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2015-11-30
	キーワード (Ja): 映像, 映像人類学, 比嘉政夫, 爬龍船
	キーワード (En):
	作成者: 稲村, 務, Inamura, Tsutomu
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32685

地理歴史人類学論集　No.3（2012）pp. 15-42
Journal of Geography, History, and Anthropology

映像人類学の可能性
—比嘉政夫先生の撮った1980年代のタイ・雲南・貴州—

稲　村　　務

The Possibility of Visual Anthropology: on the Visual Materials of Thailand and China (Yunnan, Guizhou Province) Taken by Masao Higa in 1980s

Tsutomu INAMURA

2009年に急逝された比嘉政夫先生が撮影した1980年代のタイ、雲南省、貴州省の映像を解説することおよびそこからわかる映像資料の人類学的可能性を考えることを目的とする。まず、比嘉先生の残されたビデオの日時、場所の特定をすることを主眼とする。その上で、比嘉政夫先生のアジアに対する学問を振り返りながら、急激な社会変動のなかにあるアジアにおいて映像を通じて「民俗」を記録することの意義を考える。「民俗」の記録においては「日常性」や「身体性」の問題が重要であることがわかる。また、映像資料の可能性として文字資料に書かれたものを「追体験」することができる点が重要であることがわかる。

キーワード：映像　映像人類学　比嘉政夫　爬龍船

Ⅰ　問題の所在

比嘉政夫先生は琉球大学で1973年から1994年まで教鞭を執られた。その後1994年から2002年まで国立歴史民俗博物館教授を務められ、2002年より沖縄大学に赴任され2008年に退職された。比嘉政夫先生は2009年4月13日急逝された。享年72才であった。比嘉先生は前年8月に私設の「琉球・アジア地域研究所」を開設されたばかりであり、一度訪ねてみようと思っていた矢先の訃報であった。同研究所の書籍は糸満市立博物館に比嘉政夫文庫として公開される予定である。

筆者と比嘉先生との関係は、筆者が2003年度から沖縄民俗学会で事務を担当しており、比嘉先生は学会顧問（1996年度～2009年４月）として沖縄民俗学会に携わっておられたということにすぎない。そういう意味では比嘉先生の「弟子」でもなく、同じ沖縄で社会人類学の教鞭をとっているというだけであるものの、平素から学会ではいろいろとアドバイスを頂いていた。筆者が雲南省のハニ族の研究を専門としており、本稿で解説するビデオに撮られている西双版納州などには調査で赴くことが多かったということにすぎないが、本稿では「先生」と呼ばせていただくことにする。

本稿は比嘉政夫先生が1980年代に撮影されたタイ、中国雲南省、貴州省の映像を解説し、比嘉先生のアジア理解を映像に即して問題点を指摘し、そこから考えられる映像人類学の可能性を

考えることを目的とする。

映像資料は映像だけが残っていてもいつのどこの何の資料であるのかがわからなければその資料的価値も失われてしまう。多くの場合、映像は撮りっぱなしになっていることも多く、後に資料の解説を試みようとしても無駄なことも多い。しかしながら、本映像資料は比嘉先生自身が自著で触れられていることも多く、発表レジュメ（以下「比嘉メモ」と略す）や紀行文（以下「比嘉紀行（1）（2）」と略す）も残っていることもあって、他の資料も含めた、現時点での整理をしておくことが重要である[1]。比嘉先生自身がこの映像についての資料を多く残しているのは、比嘉先生自身にとってもこの資料が重要であったということもできる。とはいえ、映像のすべてがわかったわけではなく、今後検討すべき余地も多い。もしも、先生がご健在ならば聞きたいことばかりであり、それが今は叶わなくなったことが残念でもどかしい。今後、本稿を参考に多くの人に観て頂き不明な点を補って頂けることを願う。

映像資料が客観的であるというのは単なる神話にすぎない。映像はむしろ撮影する側の主観をも反映するのであって、説明を補助するにすぎないのかもしれない。映し出された映像はたしかにわかりやすく人の心に響くし、使い方によっては実証的に使うこともできるが、むしろそれは撮影者の主観の外にあることもある。この意味で映像資料を批判的に検証することは映像人類学の基本的な姿勢であろう。

比嘉政夫先生の東南アジア理解には特にマイノリティーに対する深い共感が基礎にある。そこには比嘉先生自身が体験された戦中戦後の沖縄、またその中で社会人類学や民俗学を牽引されてきたという事情が深く関わっている。

少数民族の文化というと、とかく変化のない静態的なものと捉えられがちである。しかしながら、1980年代もすでに中国の文化大革命の後で様々な国家的な社会変化のなかにあったし、21世紀の今日から振り返ってみると1978年に始まった改革開放政策や1990年代からの大規模な観光開発等によってこの地域の景観も大きく変化している。変わらないように思われた当時の風景も今日みると、ある時代の世相を物語るものであることを思い知らされるのである。

1980年代とはいえ日本のテレビもこの地域の撮影を少なからずしているが、社会人類学者が個人でビデオ撮影を試みた例はそれほど多くはない。今日デジタルカメラを始めとするＡＶ機器の発達により、記録としてのメディア環境は大きく変貌した。かつて撮られる一方であった人々はカメラを持ち、地元にいながらにして記録する。観光客のもたらす映像や写真は過剰なほどあり、インターネットにも氾濫している。中国でも祭りなどの映像記録は中国の書店や路上で売られる程溢れている。しかし、それ以前はといえば中国の対外開放の前であり、少数民族の写真記録はそれほど多くはない。振り返って1980年代とは動画記録メディアが個人で使えるようになった初期の頃であると同時に誰もがビデオカメラを持っていたわけではないという時代であった。とはいえ、溢れる記録映像のなかにあって、比嘉先生の撮った映像は、比嘉先生の学問から切り離してしまうと、もはや記録自体の希少性としての価値はあまりないといってもよい。この原稿を書くのにもGoogle Mapや画像検索等で位置情報等を確認しようとしたが、改めて世界がとても小さくなったことを思い知らされる。

比嘉先生の向けたビデオカメラの映像は資料であると同時に比嘉先生自身の学問を理解することにもつながる。本映像資料を観ると、比嘉先生が自著に書かれている記述でまさにこのシーンだと思える場面が少なからずある。そうした点をつぶさに検証してみると映像資料はある解釈が

生まれる瞬間をも記録しており、そうした追体験を通じて比嘉先生の学問を考えることができる。映像人類学の可能性のひとつがここにある。

社会変動の中にあって何が変化し何が変化しにくいのか、そうした民俗と呼ばれる部分についてこの映像は考えさせるものであろうし、今後また何年経っても場所が特定できたならば同じ場所に立って変化を考察することもできるであろう。この映像は1980年代に観たとすると、あまりにありふれた光景であり、面白くは感じなかったかもしれない。20年余りの時が経ってみて初めて先生の撮影したものが「日常」を中心にしておられたことがいかに卓見であったのかがわかる。なぜなら、特別な事物の写真なら残り易いが街並みの変遷や物の作り方などの日常的風景は一見地味で後に残されていることは少ないからである。

社会人類学者として出発し、比較民俗学者として活躍された先生が晩年力を入れておられた映像人類学に対する思いを先生が自ら副理事長を務めておられたＮＰＯ法人沖縄映像文化研究所のウェブサイトに比嘉先生自身が載せた文章から見てみたい。

民族学・民俗学における映像記録の持つ意義　比嘉政夫　副理事長

世界の諸民族、諸地域の生活様式、即ち文化の記録には、民族（俗）学の分野では民族(俗)誌＜エスノグラフィ＞というと呼ばれるものがある。研究者の視点で現地の人々の生活を多様な角度から記述する作業である。琉球列島の民俗誌としては、宮良高弘札幌大学教授の『波照間島民俗誌』、私の大学院時代の先輩である今は亡き野口武徳成城大学教授の『池間島民俗誌』が良く知られ、いずれも昭和30年代の島の生活様式が緻密に描かれて研究者以外の人々にも琉球列島の個性的な文化を知る良き伴侶となっている。その文章のあいまに用いられた写真も、今日では見ること出来ない貴重な資料として、私たちにより具体的に感銘を与える。映像資料をもっと織り込んだ民俗誌としては、亡き比嘉康雄氏に琉球列島の祭りを記録した一連の労作がある。

1969年から1971年にかけて、私は故白鳥芳郎上智大学教授を団長とした北部タイの山地の民族学的調査に参加することが出来た。現地に3ヶ月、4ヶ月と滞在しながら、山地に住む少数民族の家族や年中行事、成人式や結婚式、葬礼、焼畑耕作などの生業形態などの調査記述を試み、その成果として多くの写真資料を織り込み、目で見る民族誌(visual ethnography)として、『東南アジア山地民族誌』というタイトルで世に問うた。

その調査中に、ヤオ族の結婚式を8ミリ映画で記録しようと、3台のカメラを駆使して頑張った思い出がある。当時の8ミリフィルムは1本で3分間しか撮れないもので、儀礼進行を撮りながらフィルム交換に苦労した思い出がある。その記録は日本民族学会で上映され多くの賛辞を得た。

文字や言葉だけで文化を紹介することは難しい。そこに一片の写真があれば多くのメッセージが伝わる。私達はタイ山地で日本の生活様式を村の人々に紹介しようと、電気もない山の村に小型の発電機を運び、白いベッド用シーツをスクリーン代用に、スライド映写会を開いた。映写会開催のニュースは山の村々に伝わり、山を隔てた隣の村からも人々が集まってきた。東京の賑やかな繁華街や新幹線の映像に人々は声を上げて反応したが、身を乗り出すようにしてスクリーンに目を注いだのは、田植え作業や盆行事の灯篭流しの場面であった。日本人も稲をつくったり、灯篭を流す祭りをしているんだ、自分達と同じ生活があるんだと、人々の顔にはあらためて日本が解ったという表情があった。

映像を通じて文化を紹介する。＜映像人類学＞というジャンルも出来てから久しい。お互いの文化をより正確に知り合うこと、それが人類の平和につながることを私達は共通の理解として進んで行きたい。沖縄映像文化研究所の理念もそこにあると思う。

（沖縄映像文化研究所http://www.lico.jp/profile/nee/vol01/p02/　2011年8月25日アクセス）

比嘉先生の映像人類学に対する意気込みを感じる文章である。この文章から比嘉先生の映像人類学が①エスノグラフィーを目指すもの②文化の相互理解を目指すものであったことがわかる。また、ヤオ族の映像などがあることがわかるものの、8ミリの原本や一部琉球大学に残っているものがあるが、琉球大学で保管されているフィルムは年月が経ちすぎており、再生は困難と思われる。

Ⅱ　比嘉先生のビデオの背景

比嘉先生は1969年(33歳)、故白鳥芳郎上智大学教授代表の「メナム河上流地帯における山地および平地民族の交錯過程の実態的調査」に参加され、1969年と1971年に計７ヶ月のタイ北部でのヤオ族を中心とする山地民族調査をされている。この時の報告は『東南アジア山地民族誌』に多くの写真とともに上梓されている[白鳥1978]。ビデオには先生の報告されたヤオ族がないものの、映像人類学のアイディア自体はこのころから繋がっていたことが前述のウェブサイトの記載からわかる。

その後1980年（44歳）から1982年にかけて、計３ヶ月にわたる香港水上居民の調査をされており、その成果の一部は『琉球大学法文学部紀要・社会学篇』32号に写真とともに掲載されている[比嘉1990]。比嘉先生の『沖縄からアジアが見える』には「中国で私が見た龍船競技は、香港、貴州省のメオ、雲南省のシーサンパンナの傣(タイ)の人たちのものでした。それらと沖縄の爬龍船との違いや共通点は何でしょうか」［比嘉1999:155］とあり、香港の「爬龍船」も射程に入っていたことがわかるが、本ビデオ映像には香港は含まれていない。また、香港の映像があるかは定かではない。

比嘉先生の当時の研究の主なテーマは「爬龍船」の比較研究であった。このテーマは、比嘉先生の東京都立大学での師であった馬淵東一氏の研究テーマの一つでもあり、白鳥芳郎氏にも引き継がれ、後の沖縄での比嘉先生の研究につながっていく[秋山・白鳥（編）1995]。また、「爬龍船」は先生が小学校五年生から高校までを過ごした糸満の「原風景」とも深く結びついている[比嘉1999:4,21]。

「この二つの祭り、ウンガミ｛塩屋湾の｝とシツィ｛西表祖納の｝に共通するのは、海のかなた、水平線の向こうの『ニライ・カナイ』という神々の世界から、年の変わり目にこの人間の住むシマ（島、あるいは集落）に神が訪れ、ユー（世、豊かさ）をもたらしてくれる、という信仰が、祭りの基礎になっていることです。人の住む世界、島や村には、外の世界との境目があり、そこから向こう側である外の世界は、いろいろな魔物や悪霊や疫病の世界であると考え、村の外れ、外との境界に大きな像を据えて悪疫が村に入るのを防ぐという風習は、日本の各地ばかりではなく朝鮮半島の天下代将軍をはじめ、世界各地に見られます。･･･人間世界とは異なる別の世界からやってくる神々への信仰は、琉球列島だけでなく日本本土やアジア各地にみられます」［比嘉1999:141-143］

1980年代の雲南省や貴州省を知る人はこの映像を懐かしく思うであろう。筆者もまた1987年（当時21歳）に雲南省のハニ族の研究を始めた。学部学生であった筆者がハニ族の研究を始めることになった当時一泊4元（当時1元＝35円程度）だった版納賓館のドミトリーも比嘉先生のカ

メラに撮影されている。当時の雲南省は昆明市、麗江地区、大理州、西双版納州が開放地区であり、それ以外の地域は未開放地区として外国人の調査や旅行は事実上できなかった。1990年代にはこれら未開放地区も次々に対外開放され、今日は雲南省のほぼ全域が開放地区となっている。

残されたＤＶＤは編集済みのもので、原版は8ミリビデオの形であるはずだが、所在不明になっている。編集された４枚のＤＶＤは先生が所長を務められた沖縄大学地域研究所で保管されていたもので、恐らくは2004年８月21日および9月18日のＮＰＯ法人沖縄映像文化研究所の定例会で発表するために編集されたものと思われる。比嘉先生自身生前多くの人に見てもらいたいとおっしゃっていたといい、同研究所の許しを経て、ＤＶＤは糸満市立図書館の比嘉政夫文庫で閲覧できるようになる予定である。

Ⅲ　映像の解説

ここでは先生の残された4枚のDVDに便宜上①タイ国紀行②雲南省ダイ族紀行③雲南省大理および昆明紀行④貴州紀行と名前をつけ、ビデオの進行に即して、近年の状況と比べながら解説していくことにする。以下の写真は断らない限り、比嘉先生の映像を静止画にしたものである。

①タイ国紀行（1時間35分）（1987年10月：51歳）

撮影場所：チェンマイ、バンコク

このＤＶＤについては、比嘉先生自身のメモや紀行文は残されていない。琉球大学の保健学科の方たちと同行のツアーであり、撮影時期は1987年10月であることが、同行した赤嶺政信氏のフィールドノートからわかる。同ノートによれば1987年10月6日午後6時にバンコクに到着、Asian Hotelに宿泊とある。旧国際空港（ドンムアン空港）の近くと思われ、Asian Airport Hotelであろう。比嘉先生一行は一泊して後、すぐにチェンマイに発ったようだが、帰途には数泊したようで、ビデオの後半にはこのホテルの周囲や内部を撮影した部分がある。

7日にバンコクを発った映像にはまず、機内から撮られたチャオプラヤー河（メナム河）が映っている。チェンマイに着いた比嘉先生一行はチェンマイ近郊のタイ人の民家を撮影している。赤嶺ノートにはドイサケット（Doi Saket）ルアンヌアと記されており、チェンマイ県内ではあるが、チェンマイ市からチェンライ県方向に行く途中にある。そこでタイ人の普通の村を撮影しており、特に高床式住居にカメラが向けられている。

写真１　チャオプラヤー河　　写真２　ルアンヌア村　　写真３　同村の高床式住居

写真４　ワットチェンマン　　写真５　砂塔

同日チェンマイ市内に戻り、ワットチェンマン寺院(Wat Chiang Man　写真左)と思われる寺院を撮影している。比嘉先生はそこで寺院の前にあった「砂塔」の撮影をしている。タイの著名な民俗学者であるアヌマーン・ラーチャトーンによれば砂塔を建てることは積善であり、主にソンクランのときに建てるものであるが、それ以外の時期でもよいようである[ラーチャトーン1979:52-55]。訪問時は10月であり、４月のソンクランの時期とは異なる。「砂塔」は、今日でも見られるものの寺院の前に造ることはないであろう。タイが仏教の合理化を進め寺院を整備していくなかで、「民俗」とでもいうべき部分を比嘉先生のカメラが捉えている。

写真６・７　2010年のワットチェンマン(2010年９月　稲村)

その後、トゥクトゥク（三輪タクシー）に乗り込んだ比嘉先生は、ワットチェディルアン（Wat Chedi Luang）の本堂での僧と在家信者の様子を撮影している。こうした風景は今日でももちろんみられるが、ワットチェンマンやワットチェディルアンの外観はすでに大きく変わっており、筆者は2010年このビデオを持ってチェンマイを訪ね、信心深いタクシーの運転手に見せて確認した。

写真８　チェンマイ市街

赤嶺ノートによれば、同日すぐにチェンマイ大学で午後4時45分に琉球大学保健学科とチェンマイ大学とのミーティングがあり、かなりハードスケジュールであったことがわかる。翌日8日と思われるが、チェンマイ市内から離れて有名なドイステープ寺院を訪れ、同寺院とチェンマイの風景を撮影している。

写真９・10・11　ワットチェディルアン

写真12・13　2010年のワットチェディルアン(2010年９月稲村)

写真14　チェンマイ大学　　写真15　ドイステープ寺院

その後の日付や場所は不明であるが、ラフ族とアカ族の村を訪れている。この村の場所は、おそらくはチェンマイ近郊のドイ・インタノン（現在は国立公園）の観光村であるように思える。

写真19はアカ族の村である。アカの女性の頭飾からウロ・アカと呼ばれるアカ族の支族(sub tribe)の村で土産物を売っていることから観光村であることがわかる。比嘉先生は村門や焼畑、女性の分業、子供の遊びに注目している。

写真16　布を編む女性　　写真17　焼畑の風景　　写真18　ラフ族の笙

写真19　ウロ・アカの女性　　写真20　アカの村門　　写真21　子どもの遊び

「アカは尾根のほぼ頂上に集落をつくります。だからヤオやメオのように水源からの樋による給水はできません。谷にある泉まで、節をくりぬいた竹筒を背負い籠に二、三本入れて水を汲みに行くのです。その仕事は女性の分担のようでした」[比嘉1999:117]。

筆者の調査経験からすると、必ずしも尾根の頂上とは限らず、山腹で樋のある集落も少なくない。比嘉先生のいう尾根の頂上の集落は、まだ焼畑が盛んで樋をわたす余裕もなく村落が短期間に移動していた時期のことで、今日は村落移動が減っているという事情もあろう。しかしながら、水汲みが女性の仕事としてかなり厳格な分業がみられることは今も間違いない。比嘉先生の男女の分業に対する観察と子供の遊びに文化の伝承性をみる視点は特に重要である。

「10歳くらいの女の子が２人広場で遊んでいるので、何をしているのかと近くに寄ってみると、『ままごと』みたいな遊びをしているようすです。地面に棒きれで線を引いて、ここ入り口、竈はあそこと、部屋の間取りを書いて遊んでいます。よく見ると、そこにはメオの人たちの家屋に共通して見られる間取り、基本的なパターンがちゃんと再現されているのです。文化というものは、そういう『遊び』のなかでも子供たちのなかにインプットされ再生産され、世代を超えて受けつがれていくもので、文化のもつがんこさ、あるいは強い自己主張は、こういう過程でつくられていくものだと思いました」[比嘉1999:118]。

写真22　ゴールデントライアングルのモニュメント　　写真23　メコン河と小舟

比嘉先生はその後メコン河河畔の観光スポットであるゴールデントライアングル（ラオス・タイ・ミャンマーの国境、チェンライ県チェンセン）の看板付近で撮影している。そこで、「この河が雲南まで続くんだな」と呟きながら、雲南まで続くメコン河を遡る小舟をずっと撮りつづけているのが印象的であった。

その後、帰途に撮ったであろうチェンマイ市街の映像がある。今日でも風景自体は大きくは変わってはいないように思う。比嘉先生一行はバンコクへ飛行機で戻るが、ドンムアン空港付近と思われる風景が映っている。

写真24　王宮付近の渋滞　　写真25　ラーマーヤナの壁画

空港からバンコクの王宮付近に行き、エメラルド寺院へ向かう。この付近の名物ともいえる渋滞に巻き込まれながら、エメラルド寺院を訪問している。

寺院の風景が撮影されるなかで、ラーマーヤナの物語を伝える壁画などに注目しており、この物語が東南アジア全体を理解するのに重要であることは『沖縄からアジアが見える』でも強調されている[比嘉1999:114]ことが思い起こされる。

チャオプラヤー河畔の水上タクシー船着場に着いた比嘉先生一行は、「御座船ナーライ・ソン・スバン」の撮影をしている。これは「龍船競技」ではなく、国王に船を披露するものであり、比嘉先生もこの船についてはどの本にもふれられていない。いわば参考例として撮影されたものであろう。

写真26　御座船

②雲南省ダイ族紀行（1時間53分）（1986年４月：50歳）

撮影場所：雲南省西双版納ダイ族自治州（景洪県、勐海県）

内容：水掛け祭り、舟漕ぎ競漕

撮影時期は1986年の4月と思われる[2]。比嘉紀行には比嘉先生も含めて「９人のグループ」であったとあり、加藤祐三氏（琉球大学名誉教授　地質学）、上里賢一氏（琉球大学名誉教授　中国文学）、西里喜行氏（元琉球大学教授　歴史家）、宮城篤正氏（元沖縄県立芸術大学学長）、比嘉康雄氏（故人　写真家）、伊礼孝氏（故人　作家）、宮里千里氏（作家）氏の名がみえる。映像から多和田真助氏（沖縄タイムス）が参加していることがわかり、先生も含めて「9人」ということになる。沖縄の錚々たる著名人である。②のビデオにはあまり同行者が映っていないが、③の遊覧船の映像では数名の顔が確認できる。

図１　西双版納ダイ族自治州

比嘉紀行には君島久子氏（国立民族学博物館名誉教授　中国文学・民族学）長谷川清氏（文教大学教授　文化人類学）栗原悟氏（相模女子大教授　東洋史・文化人類学）の名があげられている。

4月12日に昆明を発った比嘉先生一行は思茅（現普洱市）まで飛行機で行き、西双版納州（雲南省西双版納ダイ族自治州）の中心地である景洪へバスで向かった。当時西双版納州に行くにはバスで２泊３日かかって行くか、思茅まで飛行機で行き、思茅で一泊して景洪に向かうのが通例であった。現在の景洪には国際空港もあり、雲南省の大観光地として街並みは大きく変化している。

写真27・28・29　勐海県の景真八角亭

最初に水掛け祭（溌水節、ソンクラン）の映像がある。この部分は比嘉メモにはないが、映像から場所は勐海県の景真八角亭のものと思われる。そうだとすると、比嘉紀行１の1986年の４月１３日の記述が映像に該当すると思われる。

「四月十三日、午前の景洪の街から西へ一時間ばかり行った勐海県の傣族の村の水かけ祭の規模をみる。水かけといっても本来はそれぞれの村で親しい者同士が水をかけあったり、村を訪れる人に水をかけて息災を祈るしきたりであったのが、最近はやや観光化してしまい外人観光客をまきこんでのどんちゃん騒ぎに近いものになりつつあるようだ。道を走る観光バスの開いた窓めがけて、村のこどもたちが洗面器に汲んだ田んぼの水などをかける。うっかりすると泥水を頭からかぶることになるので、村に近づくとバスの乗客は窓を閉めるのに大騒ぎである。わたしは前回うしろから襟元に水をそそぎこまれた経験をもっているで、今回遠く離れて高見の見物をしようとしたのだが、村の若者に目ざとく気づかれて頭から水をかけられてしまった。水をかけあうこと、それは日本の正月の若水の風習、沖縄宮古の多良間の節まつりにスディ水をあびるのに通じている」[p.119　下線筆者]。

映像には水を掛け合う老若男女の生き生きとした表情が捉えられており、当時の素朴な水掛け祭りの様子が撮影されている。

1990年と1994年の４月に筆者もこの水掛け祭りを見物し、八角亭を訪れたことがあるが、当時のＣＩＴＳ（中国国際旅行社）などのコースツアーであった。

今日では観光コースははるかに多様化しており、水を掛け合うこと自体はソンクランの日以外でも「観光水掛祭り」をやっているという有様にまで観光化しているが、比嘉先生が撮影されたころは対外開放地が限定されているとはいえ、逆に村祭りの風情が残っていた時期であった。今日は景洪の曼廳公園にある総仏寺という本山が主導し大規模なパレードを伴っている。現在はタ

イ国との人の往来も盛んになり、ある意味タイ国のソンクランにより影響されており、当のダイ族自身には文化大革命から解放されてタイ国のものに近づいているという感覚もあろうが、素朴さは失われつつある。

写真30　勐海県のアカ　　写真31　荒れた畑の風景　　写真32　アカの村門

比嘉先生は途中でアカ族の村を訪れている。映像では比嘉先生は「ハニ族」という言い方をしているが、彼らの自称はアカであり、北部タイと同じである[稲村1996]。アカは中国の1950年代の民族識別工作と呼ばれる民族認定の過程においてハニ族の「支系」ということになった。彼らはアカ語ではアカと自称するが、中国語では「愛尼（アイニ）族」と名乗る。映像には昆洛公路と思われる道路が遠くに見えていることと、比較的新しい道路が見えていることから勐海県の南糯山山麓の姑娘寨か半坡寨の風景のように筆者には思われる。この道路は当時、南糯山の「茶樹王」と呼ばれる茶の老木の観光のために整備されつつあった道路であり、当時この付近には整備された道路は少なかった。今日、この茶の老木は枯死し、南糯山の村々も茶園の大規模な開発のため2000年代に村を移動しており、映像にある村は別の場所に移動しているかもしれない。

写真33　民族歌舞団の踊り　　写真34　ザンハの歌

比嘉先生は民族歌舞団の舞踊を観る。当時の踊りもダイ族らしいというよりも民族歌舞団らしい踊りであったが、今日はさらに「芸術化」している。なかにタイ・ルー語で歌うダイ族のザンハ（ダイ族の伝統的な歌手）が高い声の調子で歌う歌のシーンがある。

次に、景洪北部のメコン河（瀾滄江）河畔の船着場での「龍舟競渡」の映像がある。この祭りをどう表現するかは難しいところで、漢語では「龍船」「龍舟」などいかようにも書かれてあるが、本来これは水の神であるナーガの祭りであり[ジュムサイ1992(1988):88-89]、中国龍と混同すべきではないのである。もちろん、象徴としての龍は多義的であり、中国龍と混交することもあっただろうと思われるが、「龍船（舟）」と呼ぶのには抵抗感がある。

比嘉メモには「爬竜舟」「龍舟祭」、比嘉紀行には「龍舟競技」ともあり、比嘉先生自身も迷っていた様子である。ビデオには競技場本部席が映っており、前述のザンハの歌が拡声器で流されている。この競技がしばしば「競渡」とされるのはこの舟の競争が河を横切るように岸から岸へと行われることを意味している。

「雲南省の省都昆明から約400キロ南西の景洪は、傣族自治区{自治州が正しい：筆者注}の中心です。街のすぐ近くを、東南アジアを縦断する大河メコンの上流、瀾滄江が流れています。傣の人たちの龍舟競技は四月十三日、傣の正月にこの河で行われます。四月十三日は傣の正月です。傣の暦ではそのころが年の変わり目で、雨季の始まるころです。八重山のシツィと同じように、ここでも太陽暦でも太陰暦でもない、農耕のリズムに合わせた年の境目の考え方があるのです。年の変わり目に舟漕ぎが行われるのはシツィと同じですが、シツィは雨乞いとも龍のイメージともつながるものではありません。

清水江でのメオの龍舟競漕は河の流れに乗って上流から下流へ漕ぎましたが、ここでは、河の流域の村から参加した龍舟は、景洪の対岸から広い河幅を横切って漕ぎ渡ります。河幅200メートルは優にある、流れも力強い大河を漕ぎ渡るのは大変で舟は流れに押されて河を斜めに横切ることに意味がありそうです。私には対岸から必死に漕いでくる龍舟の姿に、八重山のシツィ祭りで沖合から豊穣を乗せて来る舟漕ぎのようすが重なって見えました。

舟漕ぎはいくつかの組に分かれて二艘ずつ競い、勝ち抜きで優勝した漕ぎ手たちは街を歌を歌いながら練り歩き、道端の店に祝儀をねだったりします。なかにはとおりすがりの車を止めて祝儀を求めているグループもいます。一種の無礼講が許されているようです。・・・（中略）・・・

四月十三日、シーサンパンナの傣の正月は「潑水節」（水掛け祭）としても知られています。親しい者どうし、道を行く人にも子供たちが洗面器やバケツで汲んだ水をかけるのです。田圃の泥水を掛ける子もいます。不意に水を掛けられても怒ってはいけません。水を浴びることによって災厄が流され幸福になるからです。傣の正月行事は、龍舟競漕、水掛け祭りのほかに、竹のロケットを空高く打ち上げる「高昇」、紙製の熱気球に篝火を吊るして上げる「孔明灯」など多彩ですが、琉球列島の民俗を学ぶものとしての私の視点からは、やはり、新暦（太陽暦）、旧暦（太陰暦）のいずれでもない暦による年の変わり目と、龍舟祭の結びつき、対岸から漕ぎ寄せる龍舟、競漕に勝って祝儀をねだる漕ぎ手たち、そして水掛け行事が興味を引きます」［比嘉1999:171-175　下線筆者］

写真35　孔雀湖　　写真36　街のダイ族女性　　写真37　中国銀行

写真35は西双版納州政府のある孔雀湖の風景であり、今日はライトアップされた噴水などがある。写真37は中国銀行の前のロータリーであるが、今日は高層のビル群が立ち並んでいる。

先生の撮影した商店の酒などをみると今日では考えられない安さの値札のついた酒が並んでいる。

写真36のダイ族女性の映像は比嘉先生が注目するところであるが、座り方や歩き方などの「しぐさ」に注目しているのがわかる。次の文章は比嘉先生のジェンダー論がやわらかな筆致で展開されているところである。

「新年を迎えた景洪の街は、いろいろな物売りが出て賑やかです。着飾った女性が連れ立って街を行きます。老若を問わずに髪に花をさしているのが目立ちます。案内をしてくれた人が私に『女性が未婚か既婚かは、腰のベルトに鍵束が下がっているかどうかでわかる』と言います。結婚した女性は、家の蔵などの管理をしているから、いつも鍵束を腰につけているのだそうです」[比嘉1999:178]。

写真38　舟漕ぎ競技の本部席　　写真39　女性の船　　写真40　競技の舟

特にこの龍船競渡で比嘉先生が着目しているのは女性だけの舟があることである[比嘉1999:178]。貴州のミャオ族の龍舟は、女性が乗ることすら許されていないという対比で語られている。

「雲南の傣の人たちの龍舟で気づいたことに、もうひとつ、清水江のメオの龍舟と異なるものとして『漕ぎ手が女性だけ』の龍舟があったことです。清水江では、龍舟に女性を乗せることは厳しいタブーでした。私は乗せてもらいましたが、同行の君島さんは拒否されたのです。傣の龍舟に女性が乗るのは新しい変化なのでしょうか。それとも女性の地位がメオと傣の社会では異なるのしょうか。

新年を迎えた景洪の街は、いろいろな物売りが出て賑やかです。着飾った女性が連れ立って街を行きます。老若を問わず髪に花をさしているのが目立ちます。案内をしてくれた人が私に『女性が未婚か既婚かは、腰のベルトに鍵束が下がっているかどうかでわかる』と言います。結婚した女性は、家の蔵などの管理をしているから、いつも鍵束を腰につけているのだそうです。・・・（中略）・・・日本では『夫婦別姓』、つまり男女が結婚してあとも、お互いに結婚前の姓（苗字）を名乗ることが話題になっています。シーサンパンナの傣はどうでしょうか。男性と同じように龍舟を漕ぐ女性たちを見て、漢族の社会に比べて、比較的男女は対等ではなかろうかと感じました。それについては別の機会に考えてみましょう」[比嘉1999:178-179]

写真41は日本語で龍勢といい中国語では「高昇」と呼ばれる竹ロケットであり、舟漕ぎ競漕の時に飛ばされる。写真42はダイ暦1348年を祝う景洪県政府の建物であり、この年が1986年であることが裏付けられる。

景洪の版納賓館の屋上から地上を見下ろし、突然の夕立に蜘蛛の子を散らすかのように雨宿り先に駆け込む群集を見ながら先生は「爬龍船競技が終わったら雨が降る。メコンの水が増えるね」

と呟く（写真43）。この時「ハーリー鉦がなると梅雨が明ける」という沖縄の糸満ハーリーが先生の脳裏に浮かんでいることが窺えるシーンである。ここではまさにこの日から雨季に入るのであり、糸満とは逆なのである。この点が比嘉先生の爬龍船の比較論の重要な点であった[比嘉2010]。

写真41　龍勢　　写真42　景洪県政府の建物　　写真43　版納賓館からの眺め

写真44　版納賓館のドミトリー　　写真45　凱旋の群集　　写真46　工人文化宮前広場

写真44は筆者が先生の調査の翌年に泊まることになる版納賓館のドミトリーである。写真45は比嘉先生が「競漕に勝って祝儀をねだる」と表現している酔った男たちが街を練り歩く競技の勝利凱旋の様子である。

景洪の街並みは大きく変った。先生が撮影した工人文化宮という共産党色の強かった娯楽施設は市場経済を誇示するかのごとく、オーロラビジョン、ショッピングセンター、ヨーロッパ・インド・日本・韓国の本格的レストランの立ち並ぶ飲食街などに変貌した。先生が宿泊した版納賓館も2008年に新型の「金地大酒店」という大きなホテルに変わっていた。

左：写真47　版納賓館跡地に建った金地大酒店（2009年2月　稲村）
右：写真48　版納賓館旧館（1990年8月　稲村）

写真49・50　工人文化宮と隣のショッピングモール（2009年2月　稲村）

写真51　しとぎ餅作り

比嘉先生は景洪近郊と思われるダイ族の村でしとぎ餅の作り方を撮影している。このしとぎ餅はタイ国から西双版納州まで広く見られるもので、通常はバナナの葉で包み、タイ語ではハロッソという蒸した餅である。ピーナッツなど様々なものをいれるが、比嘉先生は沖縄のムーチー（鬼餅）との比較で、作り方に特に興味を持って撮影された。現在の沖縄では今日サニン（月桃）で包むのが一般的であるものの、それだけではなかったということが述べられている。

「『カサムチ』『カーサムチ』とは植物の葉で包んだ餅のことで、葉は月桃（沖縄のことばでサニン）の葉、砂糖黍の葉、蒲葵の葉など、植物の種類は問いません。･･･タイの山地のヤオの人たちも、粽に似た保存食を作ります。それはふつう、遠い旅―二、三日かけて山地を歩き、知人や親族のいる村への旅にたずさえるもので、炊いた米飯に豚の脂身を混ぜたものに竈の灰をまぶし、外側も内側もうすく青みがかった飯を筒状にしてバナナの葉で包んだものでした。食べてみると塩っぽい味で、おそらく食塩（岩塩が多い）も入れてあったのでしょう」[比嘉1999:137-139]

③雲南省大理および昆明紀行（1986年）（1時間10分）雲南大理紀行

場所：雲南省大理市・雲南省昆明市

内容：雲南省大理市洱海（アルハイ）湖畔　白（ペー）族の村と船、瓦作りの工房
　　雲南省昆明市の街並み

比嘉紀行２によれば②の西双版納の撮影のすぐ後に撮られた映像であることがわかる。比嘉紀行２[p.145]の写真が映像と一致する。比嘉先生一行は1986年4月15日にバスで西双版納を発ち、思茅で一泊して16日に昆明に着いた後、翠湖賓館に泊まって翌日17日に車で大理に向かっている。

映像はまず大理の遊覧船から撮影されたもので4月19日の映像であることがわかる。大理盆地の大きな湖である洱海が美しい。遊覧船に同乗している方々の中には前述の沖縄からの「9

図２　大理

人」のうち数人の顔と通訳の方々の顔が確認できる。

比嘉紀行２によれば、遊覧船に乗る前に「楊氏門中」という先祖の祭壇（掛け軸の裏にあったという）を特別の許しを得て撮影されている。この写真は平成4年放送の琉球大学公開講座のなかで比嘉先生が「中国の大理のある少数民族の村で撮影した」と発言されている「門中」の文字でそれがペー族（白族）のものであったことがわかる。

写真52　遊覧船

比嘉先生の「門中」の比較論のなかで中国、韓国、沖縄の「門中」という比較が展開されるが、中国についてはマレーシア華僑の清明節とペー族の「門中」が紹介され、中国では「門中」というのは生存する父系出自集団ではなく、既に亡くなった人の出自を示す語であることが公開講座では説明されている。視聴者には唐突になぜ少数民族と華僑で中国を説明するのだろうかという疑問がわいてくるだろう。ここには13億人もの民族的集団である「漢族」、あるいは便宜的に「中国人」という語を用いたとしても何を以って漢族を代表させるべきかという悩ましい問題がある。ペー族は後に米国

写真53　金梭島遠景

写真54　禁漁期の船の様子

写真55　金梭島内の村の様子

写真56左・57右　本主廟（？）

写真58　船大工

写真59・60　鉄船の龍の装飾

写真61　帆船

人類学会会長になるフランシス・シュー（許烺光）が民族識別工作以前の1940年代に漢族であるかの如く書いた古い漢文化を保持しようとした少数民族であり、イギリスの社会人類学者E.リーチが彼らはチベット・ビルマ語系の人々だと批判した民族的集団である[リーチ1985(1982):156-157 cite Hsu 1949]。また華僑は共産革命から逃れて文化を保持しようとした人々であることを考えると、比嘉先生の資料の選択は穏当であろうと思える。

4月19日の映像は冒頭部分に編集されており、金梭島[3]へ遊覧船で向かっている。金梭島で目当てにしていた鉄船の龍船を撮影されている。比嘉メモには「偉人を祀る廟／孔子廟　関羽廟」とあるが、おそらくこれは「本主廟」[4]のように思える。同島で漁船の修理風景を撮影しており、リズミカルに槌を振るう船大工の巧みな仕事ぶりを撮影している。比嘉メモには「禁漁期の舟溜り　4月＝禁漁期」とあり、映像には網を洗う人なども映っている。帆走する白帆の帆船が美しい場面が多い。

比嘉メモには漁船の帰航（大理市）と書かれている。この「大理市」が州都であった下関か現在「大理古城」と呼ばれる地域か映像からは断定できなかった。ソラマメの脱粒をしている人々を撮影している場面は下関かも知れない。唐棹を使った作業で、比嘉メモには「沖縄の車棒（クルマンボー）と類似」とある。

写真62　下関の港

写真63　唐棹での作業

比嘉メモには「貯水池の周縁　大理から昆明の移動途中にある町／ひんぷんのある建造物」とあり、ペー族の家並みを撮影しているが、場所は不明である（写真64）。そこで休憩をとった様子で馬車とすれ違いながら屋根瓦を作っている工房に着いている。これも具体的な場所はわからなかったが、より昆明に近い所だと思う。比嘉先生はここで沖縄と類似した屋根瓦の製作過程を撮影している。

写真64　湖畔の村

写真65・66・67　屋根瓦の工房

昆明から大理までの当時の道路はかなりの悪路であり、車で１泊２日はかかったと思う。今日では大理には空港が整備され、昆明からは鉄道や高速道路を使って数時間で行くことができるようになっている。

比嘉先生は昆明市内の懐かしい映像を残されている。南京街のプラタナス並木、昆明動物園付近の学生街付近の大通り、昆明の中心部などが映し出されている。昆明飯店（写真68）に立寄っているのはここで誰かが車から降りたせいであろう。比嘉先生自身は翠湖賓館に泊まったことを比嘉紀行に記している。当時の昆明は人口百万人ぐらいだったのが、今日では実質五百万人ほどの大都市になっている。

写真68　昆明飯店

④貴州紀行(1986年6月～7月)　(1時間40分)

場所：貴州省貴陽
　　貴州省凱里

内容：貴州省清水江（台江県施洞）の龍船競技

このビデオに関して比嘉メモには1988年と記載されているが、君島久子氏の記載では1986年[君島1990:33]とあり、比嘉紀行の記載が正しいとすれば1986年ということになる。そうだとすれば②③に続いて同じ年の6月に撮影されたことになる。この祭りは清代の記録からも旧暦5月25日と定められており、1986年の新暦だと7月1日にあたる。

図３　貴州

このビデオは貴州省台江県の清水江の「龍舟節」を中心とした映像であり、特に貴重であり、映像自体も迫力のあるものである。比嘉先生は特に気に入っていた様子である。その映像の一部は琉球大学公開講座でも使っており、論文・著書でもたびたび触れている映像である。しかしながら、筆者は貴州に行ったことがなく、十分な解説はできないことを断っておく。

写真69　貴州民族学院　　写真70　貴陽の毛沢東像　　写真71　貴州省文聯(中央は君島久子氏)

おそらく貴州民族学院の風景と思われる。その後、貴州の省都貴陽の中心部が映し出されている。工事中のところが多く当時の雰囲気が伝わってくる。通訳の方が毛沢東像を指して、「知ってますか？文化大革命を作った人」という言葉が一時代からの解放を思わせる。

「貴州省文聯」（貴州省作家協会）に君島久子氏と行ったことが映像からわかる。残念ながら君島氏以外の通訳などの同行者の面々や中国側のカウンターパートについて映像から筆者にはわからなかった。当時の日中の交流として比嘉先生の書かれたエピソードが心に浮かんだ。

「帰りに寄った新華書店で沖縄の民話集を訳した『白鳥姑娘（沖縄民間故事）』（王汝瀾訳）というのが店頭に出ていたので買う。巻末の説明には仲井真元楷氏などの本を大阪の国立民族学博物館の君島久子教授が中国の研究者に紹介したことが出版のきっかけになったようである。後日君島さんに確かめたところ、そのとおりでありさらに表紙の絵柄などについてもコメントをつけたがどうなったのだろうと気にしておられた。たしかに表紙には沖縄婦人の髪型や衣裳とは異なる日本の芸者のような婦人の絵が描かれている。本を開いてみるとモーイー親方の話などが載っていて面白そうである」[比嘉紀行 1:118]

比嘉先生の比較民俗学が双方向であることがよくわかるエピソードである。ここに比較民俗学の意義のひとつがあるであろう。

族称について付言しておくと、比嘉先生の記述にはメオという表記とミャオという表記があり、一定していない。彼らの自称はムウやモンであり、「人」という意味であり、チベット・ビルマ語系の民族的集団であり、中国では730万人ほどの人口がある。東南アジア諸国の英文ではHmongとして知られ、古くはMeoという表記も用いられていた。日本語だとモン（Mon）はモン・クメール語系の別の民族を指してしまうので英語表記からフモン族、メオ族と書く研究者も多い。一方中国では1950年代の民族識別工作によって「苗族」という漢字表記が用いられるようになり、それを中国語読みしたミャオという語が一般化したという日本語表記上の事情がある。

写真72　凱里の遠景と街並み

表記の問題はともかくこれらは同一の民族的集団を指しているのである。本稿ではミャオ族としておく。

比嘉先生一行は貴陽を発ち、凱里に向かう。凱里の街並みとホテルからの遠景が映っている。比嘉先生は次のように記している。

「私は龍舟行事にも詳しい君島さんをはじめ二、三人の人たちと、貴州省の首府貴陽市から120キロばかり離れた凱里という地域に行きました。その近くを流れる清水江はその名のとおりきれいな水の川で、中国では黄河や揚子江や閩江のような黄色く濁っている河川しかみたことのない私にとっては、これが初めての経験でした。この清水江の沿岸には多くのメオの人たちの村があり、その川で毎年五月の下旬頃、龍舟を漕ぐ祭りをやっていると聞いたのです」[比嘉1999:166]

写真73・74　ミャオ族の歌と笙

写真75・76　ミャオ族の踊り

比嘉メモには「ミャオ族の踊り　ケーン（芦笙）」「ミャオ族の女性の歌　装飾品＝全財産である銀」「ミャオ族の女性の踊り　独特のステップ」という記載がある。比嘉先生の撮影する踊りの映像は特に足運びがよく撮られている。比嘉先生はこれらの踊りが足運びを互いに模倣することで伝承されていることに気づいて、そこにカメラが向けられていることがわかる。文革当時途絶えかかっていた踊りが足で記憶されていて、それが想起されていく瞬間をとらえているように思える。また、伝承が復興されている過程で学校が重要な役割を果たしていたことが映像から窺える。また、ミャオ族の女性が財産として銀の装飾を纏うことからチベット系の遊牧民的な文化要素を見出していたのかもしれない。

凱里から台江に向かう。比嘉先生は6月末ごろに台江から船で清江を遡ったと思われるが以下のように記している。

「祭りの二、三日前、清水江を小さな舟でさかのぼりました。ところどころ流れが速いところがありましたが、全体にはゆったりした流れの川です。上流に帆をつけた船が川をさかのぼっていくのが見えます。流れがゆるいから帆走だけで川をのぼって行けるのかと思いつつ近づいてみると、岸に三、四人の人がいて、船を曳いていました。中学生のころ学んだ『南船北馬』ということばを思い出しました。中国南部は船で河川や運河を利用する交通手段が発達し、北部では陸地を馬で行くことが多いということを示すことばです。

両岸には菜の花の畑が見え、いくつかのメオの集落もあります。よく見ると各集落に龍舟を収める長い屋根の建物があって、その下には"化粧"を施した龍舟が浮かんでいました。祭りの準備も進んでいるようです」［比嘉1999:166］

写真77　綱で曳かれる舟

比嘉メモにも「南船北馬」という記載があり、比嘉先生が前述の文章を書いたのはこのシーンについてであるとわかる。教育者としての比嘉先生の人柄が感じ取れるシーンである。このシーン前後には様々な種類の船が映像に収められており、船を専門とする人には是非見ていただきたいシーンである。

台江で一泊したかもしれない。舟に乗って施洞に向かったと思われる。比嘉先生はここでミャオ族の「龍舟節」を撮影している。この当時の報告としては鈴木正崇氏、金丸良子氏、萩原秀三郎氏、君島久子氏らの報告があり、この儀礼については特に鈴木正崇氏の論文[2010]を参照していただきたい。ただし、鈴木氏は以下のように「始まりの儀礼」を見ることができなかったと告白しているが、比嘉先生の映像記録はこのティガーハーと思われる部分をよく撮影している(写真85～87)。鈴木氏の聞書きによって儀礼の所作の意味が視覚的にもよく分かるようになる部分である。語られている神話の内容についてはミャオ語でわからないが、録音は比較的よい。おそらく地元の学者によって本が出ていると思われるので対照しながら聞くこともできよう。

「龍船の始まりの儀礼は見ることができなかったが、施洞で聞書をとった。それによると、龍船を水に降ろす前に川辺に小さな樹をさして、枝に白い布をかけ、一羽の白い雄鶏を殺して、鶏血で白い布を紅く染める。酒と肉を供物にして捧げ、線香を燈して紙銭を焼く。巫師が祭祀を執行して祖先の霊魂を招いて祀る（祭祖）。祖先を招いて、現在の生きている人々と一緒に賑やかに過ごすのである。龍船の頭には紅い絹布（紅綢）をかけ、龍がおだやかになること（龍順）を願う。龍船が水に降ろされる時、鉄砲を鳴らす。出発時にも三回、龍船が各村につく前に三回鳴らし、村の人々に龍船が来たことを通知する。

一九八二年の報告[呉通発　一九八二：一一六]で補うと、龍船を水に下ろす時は、「寨老」が河原の船の前で早朝に祖先祭祀を行い龍船の起源についての唱え言をする。この祈願を苗語でティガーハー（dit ghabh hiab.地戛哈）といい山の神（vangx diongl）を祀る。白い鶏を供犠して、山の神に龍船の安全を祈り、銅鑼と太鼓を鳴らして龍船を漕ぎ出す」[鈴木2010:201]。

写真78・79　ミャオ族の龍船

写真80　ミャオ族女性の簪

写真81　岸に寄る龍船

写真82・83・84　鼓頭と贈り物

写真85・86・87　龍船の始まりの儀礼

写真88　競技本部

写真89　くじ引き

写真90　見物に来たミャオ族の子供たち

写真91・92・93　龍舟節の舟漕ぎ競漕

撮影された清水江の風景は美しい。観光客も少なく比嘉先生は大変感銘を受けていたことが映像からも感じられる。比嘉先生はミャオ族の簪に興味をもって撮影している。これは東恩納寛惇の記述などを意識していると思われる。ダイ族とは違ってミャオ族は河の流れに沿って競漕する。そのため、くじ引きのシーン（写真89）が面白い。河の流れの速さは場所によって違うのでくじで決める必要があるのである。

龍舟が川岸に寄って来るシーン（写真81）はたしかに、物悲しい銅鑼の音とともに別世界か

ら何ものかをもたらすような雰囲気をかもし出しており、直感的には比嘉先生が沖縄でいうユー（豊穣）をもたらすと考えたのも無理はないように思える[琉球大学公開講座]。しかしながら、このシーンの解釈は後に「私たちが清水江で見た、村人たちが龍舟に贈り物をしていたのは鼓頭のためだったのです」[比嘉1999:170]と訂正されている。

写真94・95　台江の招待所からの風景

最後のシーンは台江の招待所からであろうか。家並みとミャオ族の人々との別れを惜しむように撮影されている。ちなみに、大阪の国立民族学博物館の常設展の東アジアのフロアには貴州のミャオ族の龍船が中央に飾られている。この龍舟は1982年にすでに博物館に展示されており、筆者は詳しいいきさつについては承知していないが、比嘉先生も国立民族学博物館には度々いらしたはずで、ご覧になっていたであろう。

Ⅳ　比嘉先生の視点

比嘉先生は岩波ジュニア文庫として発表された『沖縄からアジアが見える』のあとがきに次のように書いている。

「この本のタイトルを『沖縄からアジアが見える』としましたが、私はここで、文化の系統論や伝播論を書いたつもりはありません。小さな島の文化が、大きな歴史の流れのなかで『どのように自らを守り主張しようとしたか』を考えてみることが、これから必要になってくるだろうとの思いから、中国や東南アジアのわずかな私の体験のなかで、常に自分の文化、自分の育った地域の歴史を振り返り、反芻しながら、見聞したアジアの、とくにマイノリティーの人々の生活を紹介したつもりです」[比嘉1999:213]。

しかしながら、比嘉先生の視点はやはり比嘉春潮、柳田国男の「海上の道」[5]に基礎があり、伝播論・系統論から自由なわけではなかった。やはり、文化の全体的把握という見方に立てば、要素主義的であり、「アジアに沖縄を見る」視点であったように思える。この「系統論や伝播論を書いたつもりはありません」という言い方には、「系統論や伝播論」としては歴史主義的な先学のような史料的証明をしようとしたものではないということとフィールドワークによって沖縄の学生にもっとアジアに目を向けてほしいという思いが生んだ表現ではないだろうか。

先生は物質文化についてはその視点の有効性を発揮されているものの、言葉の壁を乗り越えることはできなかった。その点、言葉の分析を必要とする世界観などの観念的部分については鈴木正崇氏の象徴論を踏まえた分析が凌駕している。鈴木氏は比嘉先生と同時代にこの祭りを調査し、

報告している[鈴木・金丸1985,鈴木1985]が、比嘉先生は参照されなかった。鈴木氏の射程に沖縄や長崎の爬龍船の比較は入っているが、その枠組みは伝播論ではなく象徴的論理の比較を目指している。鈴木氏はミャオ族の祭祀のうち龍舟節と姉妹節の比較を行い、その象徴性を明らかにしたいう点でより方法論的であり、手堅い研究をしている[鈴木2010]。鈴木氏によれば前述の比嘉先生が訂正したシーンも含めて、周囲十数ヶ村が象徴的に「死んだ龍の肉」を分け合う儀礼であり、これは神話と儀礼を相互に対照させながら全体社会に位置づけないと理解できない儀礼なのである。

比嘉先生もこうした点や当時の人類学のパラダイムの転換についてわかっていたと思う。それにしても沖縄の民俗学を背負い過ぎていた先生は、琉球・沖縄の文化を広くアジアに位置づけなければならない責任から自由ではなかった。沖縄に閉じこもらずアジア各地に琉球・沖縄の文化を位置づけようとする試みは、アジアの広範な地域におよび、枠組みとしても要素主義的で直感的なものにならざるを得なかったであろう。

比嘉先生は研究が進歩することを信じて止まなかった先生であり、こうした批判にも笑ってもっとやれとおっしゃったと思う。比嘉先生は『歴博』の自著紹介の欄に「端午の節に行われる舟漕ぎ儀礼、沖縄のハーリー（爬龍船）行事など、中国文化の受容とみられる一方、漢文化だけでなく他の東南アジア地域の民俗にも類似したものがあり、儀礼の構造分析を含めてより広い視点が必要である」[比嘉2000:29]と書いており、おそらく鈴木氏のような「儀礼の構造分析」を望んでおられたと思う。

鈴木氏がこの仕事をするのに四半世紀を経ていることを考えると、その間にも地元の学者による多くの論著や神話や儀礼のテキストが出され、鈴木氏の研究もそれらを踏まえている。その間にも観光化や近代化の波は容赦なくこの祭りを変容させてきた。それでも鈴木氏がこの1980年代の祭りに拘ったのは、それだけこの当時の祭りがミャオ族の文化理解にとって重要であったということができる。

ここではこれ以上詳細に論じることは出来ないが、比嘉先生から鈴木正崇氏への学問的パラダイムの変化は、新しさばかりを追い求める近年の人類学とは違って、着実な研究の進歩の軌跡をみせている。そうした人類学の学習のための教材としても比嘉先生の映像を役立てることが出来るだろう。出来上がった論文よりも論文が出来上がるまでの過程のほうが学生にとってはるかに勉強になることもある。

比嘉先生の比較民俗論には前述の漢族の場合と同様に、何を以って「琉球/沖縄」というかという問題を含んでいることは付言しておかなければならない。あるいはミャオ族、ダイ族も同様に同じ問題がある。民俗は知れば知るほど多様性に満ちており、原型のようなものを復元しようとすればするほどまた困難に陥る。そこには構造論的な比較の視点が必要になるであろうし、前述の鈴木氏が見せたような象徴論でいうところの「象徴的転換」などの理論的枠組みが必要になる。つまり、それはレヴィ=ストロースのいうような神話を変換されるものとして捉える視点であり、いくつもの異伝と儀礼を相互に対照させていく方法をとる。

しかし、こうした理論的な枠組みが変化や衰亡に瀕している民俗を担っている人々自身に「民俗の本来の姿」といった明快な答えを提供しないことは明らかである。前述の構造論的視点が多様な沖縄奄美の民俗の分析にも可能なことはよくわかる。当時の民俗学と人類学の視点の違いのなかで苦悶しながら『沖縄からアジアが見える』を書かれたことはこうした映像を通してみると

よくわかるのである。

比嘉先生の映像はたしかに映像人類学の可能性を示してくれた。比嘉先生の映像は四半世紀を経てみて、文化の伝承の身体性、日常性への視点が重要であることを教えてくれる。記録メディアが世界を多い尽くそうとする中にあって、こうした視点に立った記録が重要なのだということが改めてわかるのである。

比嘉先生の雲南での最後の仕事になってしまった『雲南少数民族（瀾滄江流域）的文化与森林保護』（納麒・大崎・鄭・杉浦編　中国書籍出版社　2006年）は中国語と英語で出版された。国学院大学の大崎正治氏の科研による調査であり、シンポジウムも行われた。筆者は沖縄民俗学会で先生にお会いした時にポンと渡されたのを覚えている。先生は同書のなかで、「琉球（沖縄）、雲南、日本本土の神と自然」という国学院大学で開催されたシンポジウムで問題提起をしたレジュメの文章と、「森林と精神世界」という雲南の九つの少数民族の報告から読み取った総括部分を書いている。

内容について本稿では立ち入らないが、本映像でしばしば木のない山々や[6]、山麓の畑、寺の菩提樹などが映っており、撮影当時から生態系と少数民族の生態系に対する宗教的観念に興味をもっていたことがわかる。少数民族の聖林への伝統的な保護意識は、沖縄のウタキにも通じるところである。

近年東南アジアや中国で増えてきている大洪水を考えると、大躍進政策や文化大革命への反省にたった少数民族の伝統保護と生態系保持が政策的にいわれるようになった。中国政府も1990年代からの「退耕還林」政策にみられるように植樹を進めており、それは最近の雲南の風景にも感じることができる。

時の流れを遡ることはできない。筆者にできることは限られているが、比嘉先生の著作のうちアジアにかんする部分については、映像がそれを「追体験」することができるという点が重要であったことがわかった。人類学はその検証性が乏しいという点で科学的でないという批判がある。映像記録もまたカメラをどこに向けるかは撮影者の意図によるものでもあり、厳密な意味での科学性を保証するものではない。しかしながら、ある解釈がどのように生まれたのかということを「追体験」させることができるという点で検証を開かれたものにすることができる。そうした意味で比嘉先生の撮った映像は、今日的な映像人類学の可能性をみせてくれたということができる。

比嘉先生はあまりにも忙しすぎたし、アジアの社会変動もあまりにも急激であった。沖縄大学を退職され、私設の「琉球・アジア地域研究所」でこれから東南アジアの研究を本格的に進めようとされていたことを考えると、もっと話をしておけばよかったと残念な気持ちでいっぱいになる。先生のご冥福を心からお祈りしたい。多くの人にこのDVDを見て頂き、比嘉先生の提起された問題と本稿が明らかにできなかった点を考えて頂くことを切に願う。

謝辞　掲載許可と資料を提供して頂いた沖縄大学の須藤義人氏に感謝申し上げる。津波高志先生には映像をみて不明な点をご教示頂いたことを感謝申し上げる。ノートをみせて頂いた赤嶺政信先生にも感謝したい。②については長谷川清先生（文教大学）③については横山廣子先生（国立民族学博物館）にビデオをみて頂き貴重な御意見を頂いた。あわせて御礼を申しあげる。なお、拙稿の責はすべて筆者自身にある。最後に比嘉政夫先生の学恩に深く感謝申し上げ、拙稿を捧げたい。

参照文献

稲村務

1996「アカ族・ハニ族・アイニ族－中国雲南省西双版納州における『アカ種族』の国民統合過程」『東南アジア－歴史と文化』25号
東南アジア史学会　山川出版社 pp.58-82

上田信

2009「タカラガイと文明」
『地球環境史からの問い』池谷和信編著　岩波書店pp.137-152

比嘉政夫

1989「沖縄民俗文化の特性―年中行事から見る周辺文化との関連性―」
『地域からの発想』琉球大学放送公開講座10 pp.89-108

1990「香港の漁村における竜舟祭祀とその運営組織―大嶼山と大澳と東涌の事例報告―」『琉球大学法文学部紀要・社会学篇』32号　pp.37-57

1999『沖縄からアジアが見える』岩波ジュニア新書327

2000「自著紹介　比嘉政夫著『沖縄からアジアが見える』」
『歴博』101号　p.29

2006「琉球 冲绳 云南 日本本土的众神仙和自然」
「森林与精神文化」(時雨彰・　张雍德と共著)
(纳麒等編2006所収)

2010「爬龍船考―沖縄民俗学の視点から―」
(初出1990＝比嘉1989を改稿して『沖縄文化研究』(1990)に掲載)、
「沖縄の古層文化と中国―来訪神儀礼をめぐって―」(初出1993)
「比嘉政夫年譜」(2010　粟国恭子作成)
『沖縄の親族・信仰・祭祀―社会人類学の視座から』榕樹書林

n.d.a「海外調査紀行　中国・雲南・貴州紀行―傣族と苗族に龍舟祭の源流をたずねて―」
(pp.114-121計8ページ)、

n.d.b「海外調査紀行　中国・雲南・貴州紀行―傣族と苗族に龍舟祭の源流をたずねて―（二)」
(pp.140-145計8ページ)

白鳥芳郎

1978『東南アジア山地民族誌：ヤオとその隣接諸種族』講談社

白鳥芳郎・秋山一（編）

1995『沖縄船漕ぎ祭祀の民族学的研究』勉誠社

鈴木正崇・金丸良子

1985『西南中国の少数民族―貴州省苗族民俗誌―』古今書院

鈴木正崇

1985『中国南部少数民族誌―海南島・雲南・貴州』三和書房

1988「龍船節についての一考察－貴州省・苗族の事例研究」
『漢民族を取り巻く世界』　学習院大学東洋文化研究所　pp.105-122

1990「龍の顕現―貴州省苗族の世界観の諸相」

『文化人類学』 8　アカデミア出版会 pp. 98-103
2010「祭祀と世界観の変容―中国貴州省苗族の龍船節をめぐって―」
『法学研究』Vol.83.No.2 慶應義塾大学法学研究会（編）pp.181-254
君島久子
1986「中国文献にみる龍舟競渡～方志資料を中心として～」
『国立民族学博物館研究報告』11巻2号
1990「龍神説話の二面性－斬孽龍伝説を中心として」
『アジア諸民族の歴史と文化―白鳥芳郎教授古稀記念論叢―』
六興出版 pp.15-36
横山廣子
1990「『土』のカテゴリーからの離脱―白族の本主信仰をめぐって―」
『文化人類学』 8　アカデミア出版会 pp.86-97
1991「白族の本主信仰―地域の守護神の儀礼に見られる漢化と民族の独自性」『国立民族学博物館研究報告別冊』14号　竹村卓二（編）pp.381-422
ラーチャトン,アヌマーン
1979『タイ民衆生活誌(1)―祭りと信仰』森幹男編訳　勁草書房
リーチ,E.
1985(1982)『社会人類学案内』長島信弘訳　岩波書店
ジュムサイ,S.
1992(1988)『水の神ナーガ：アジアの水辺空間と文化』西村幸夫訳
鹿島出版会
Hsu,F.L.K
1949 *Under the Ancestors of Shadow: Chinese Culture and Personality.*
London.Routledge and Kegan Paul.
纳麒・大崎正治・郑晓云・杉浦孝昌（编）
2006『云南少数民族（瀾沧江流域） 的文化与森林保护』
中国书籍出版社　北京

参照映像

平成4年度　琉球大学放送公開講座「沖縄文化研究の新しい展開」
第11回環中国海文化と沖縄」琉球大学法文学部教授（当時）
沖縄テレビ製作（45分）

インターネット

比嘉政夫「民族学・民俗学における映像記録の持つ意義」
http://www.lico.jp/profile/nee/vol01/p02/（2011年8月25日アクセス）沖縄映像文化研究所

[1] 比嘉メモ；比嘉先生は2004年にＮＰＯ法人沖縄映像文化研究所の定例会で8月21日および9月18日にこの映像について口頭発表されている。いずれも市民向けの発表で原典表示などが十分されていないのが残念であるが、8月の発表は「中国雲南・貴州紀行　貴州篇―ミャオ族に龍舟祭の源流をたずねて」という題目、9月は「中国雲南・貴州紀行　雲南篇―白族・タイ族に龍舟祭の源流をたずねて」という題目でシーンのタイトルが並べられたレジュメ（これを「比嘉メモ」と呼ぶことにする）と地図および紀行文が当日配布されている。地図にはあまり細かい指示はされておらず、大まかな都市名などが指示されているのみである。添えられた紀行文は「海外調査紀行　中国・雲南・貴州紀行―傣族と苗族に龍舟祭の源流をたずねて―」(pp.114-121計8ページ)、「海外調査紀行　中国・雲南・貴州紀行―傣族と苗族に龍舟祭の源流をたずねて―（二）」(pp.140-145計8ページ）という二篇である（以下、前者を比嘉紀行（1）、後者を比嘉紀行（2）と略すことにする)。この紀行文については出典を探したものの結局探し出すことはできなかった。比嘉紀行（1）の末尾には「(未完)」との記載があり、比嘉紀行（2）にはそれがないのでこの二篇で完結したようである。タイトルには「貴州紀行」とも書かれているものの貴州についての記載はほとんどなく、比嘉紀行（2）にはペー族についての記載が多い。

[2] 定例会レジュメ（2004. 9. 18）には「海外調査紀行・雲南紀行1988」とあり、1988年とされているが、レジュメよりも紀行文（1）の記述のほうが正確だと判断した。同紀行文によれば1986年4月の水かけ祭りの時期に西双版納州を訪れており、「私は前回うしろから襟元に水をそそぎこまれた経験をもっているので」(p.119)という記述から水かけ祭りは二度目だということがわかる。前回とは1982年と思われる（p.118)。映像には「傣暦1348新年」の文字が州政府の劇場内の横断幕と景洪県政府の正門に掲げられており、それからこの年が西暦1986年の4月であることが裏付けられる。なお、傣暦とは西双版納州のタイ・ルー族固有の暦のことである。

[3] 洱海には金梭島が二つある。比嘉先生の訪れたのは南部のほうである。

[4] 「本主信仰」：白族の間に見られる独特の信仰になったもので漢文化的な要素を取り入れつつ新中国成立から徐々に「本主」という語が使われるようになったが、もともとは地元の英雄、自然崇拝と農業に関わるもの、神の家族や親族、死をもって事に務めた者などを祀ったもの［詳しくは横山1990,1991参照]。

[5] 近年の考古学や形質人類学では実体的な人間の移動としての「海上の道」仮説は否定される傾向が強い。実体的な人間の移動ではなく、文化伝播の問題として沖縄と雲南貴州とを結ぶ交易圏としても、やはり「海上の道」のような直接的な接触は見出しにくい。柳田の「海上の道」で有名なタカラガイ（子安貝）は、アカ族がよく頭飾などの装飾品として用いるものであり、一見沖縄を含むような交易圏の存在を思わせる。東洋史の上田信はそのアカ族のタカラガイについて詳細な歴史学的検討をしている[上田2009]が、沖縄とアカ族を結びつけるような近代以前のルートは上田の研究からも考えにくい。

[6] 映像の1980年代当時でも焼畑はすでにほとんどみられなくなっており、山の木々がなくなっているのは、大躍進政策（1958-1960）や文化大革命（1966-1976）の急進的な近代化政策のためであることは『雲南少数民族的文化与森林保護』でも各少数民族の事例で明らかである。